

本書では東条英機・石原莞爾・犬養毅・渡辺和子・瀬島龍三・吉田茂の6人が「戦争の目撃者達」として取り上げられています。

1931年から1945年まで続いた15年戦争（満州事変・雑誌日中戦争・大東亜戦争（太平洋戦争））に上記6名がどのようにコミットしたかを著者の保阪正康氏は簡潔に述べています。膨大な資料の中から選りすぐった情報をこの著書で述べているので、それを要約するのは難しく十分に情報をお伝えすることが出来ないのが残念です。

① 東条英機が首相に任命されたのは大東亜戦争が始まる1941年でした。昭和天皇は東条が2.26事件の時、速やかに反乱軍を制圧すべきだと述べたこともあって昭和天皇の信頼が厚く、戦争強行派を抑えられるのは東条しかないだろうということで、首相に任命されましたが結局は強行派の動きを抑えることができず、12月8日の大東亜戦争（後に太平洋戦争と呼称される）開戦に至りました。ひとたび戦争が始まれば決して負けるわけにはいかない。いかなることがあっても対米戦争は勝つ！という信念のもとにつきすすみ、彼の精神論は現実の戦力には全く裏打ちされてなかったにもかかわらず、グアム、サイパン島の敗戦に至るまで、首相の座にとどまり、終戦の機会を逸しました。三年八カ月続いた太平洋戦争のうち二年九カ月、軍事上の指導者だった東条秀樹のあまりにも非知性的な精神論が多大な犠牲を生ぜしめたと言われていています。

②石原莞爾

石原莞爾は1931年の奉天・柳条湖における満州事変を策謀した軍人として有名ですが満州を日本の傀儡国家とすることは彼のよしとするところではなく、東亜は協調しなくてはいけないという考えの持ち主でした。彼は最終的には欧米と東亜連合が最終戦争をして世界に平和がもたらされるという説の持ち主でした。戦後に彼はこの考え方の誤りを反省しています。東条の戦争拡大の方針には一貫して反対していたために戦犯にはなりません。彼は軍人の中でも独特のパーソナリティの持ち主です。満州事変が勃発した後は満州を傀儡国家にしないようにという動きを続けましたが、一個人の考えでは満州国の建国と発展をとどめ得るのは困難だったような気がします。歴史と個人、これがどのように関わりあっているかと言うテーマは永遠のテーマであるような気がします。彼は軍人には珍しく、哲学的、文学的素養があり、戦後になって著作集全八巻が刊行されました。軍人の中で著作集が刊行されたのは石原莞爾だけです。

③ 犬養毅は5.15事件で反乱軍に暗殺され、その時に「話せばわかる」と述べたことで有名ですがこの話は本当ではなかったようです。辛亥革命の時は孫文を支援するなど広い視野の持ち主でした。もし彼が5.15事件で殺されず犬養政権が存続していたら日中戦争は違う局面に展開しただろうと推測されています。犬養毅は「憲政の神様」と言われ日本の議会政治の申し子と言われ、議会人として多くの功績がありますが、いくつかの過ちを犯したことも事実です。ロンドンの軍縮会議で日本政府が対英米比率7割近くという数字を政府が受け入れた時に統帥権干犯という言葉を使って犬養毅はじめ野党の

人々は抗議しましたがこれは軍部に公然と統帥権干犯という伝家の宝刀を教えることになったという点で大きな過ちであったと言われていました。

時代が進んでから「統帥権の干犯」という言葉を使って軍は政府には従わず自分達が好きなように動くという状況が生じたことを考えると犬養氏達は伝家の宝刀をぬいてしまったことを保阪氏は示唆しているようです。

犬養毅氏は長男の健氏の長女である道子氏を溺愛していて人生の機微を教え込んでいたように見えると著者の保阪氏は述べています。「花々と星々と」という美しい著書の中で、犬養道子氏はちっちゃな女の子が観察した犬養家の生き生きとした様子を描いています。杉並区の図書館にもありますから興味のある方はお読みください。

④ 渡辺和子

渡辺和子は 2.26 事件で皇道派の将校に殺された渡辺錠太郎の次女で長い間岡山山のノートルダム女子大の学長をつとめました。2月26日の早朝、教育総監渡辺錠太郎と和子が寝ている部屋に将校達が入ってきて、和子の目前で錠太郎は暗殺されました。その後和子はカトリックの洗礼を受け、修道院に入ってシスターになりました。四谷の雙葉の先輩として私は長い間シスター渡辺とお呼びして尊敬してまいりました。美しくて聡明な方でした。2.26 事件の時に襲撃された渡辺邸は荻窪の本村庵の裏手に長い間残っていましたが数年前に取り壊されてマンションになりました。

著者の保阪氏に和子は「2.26 事件は私にとって許しの対象からはずれています」と語ったと記されています。あの当時、反乱軍の将校の後方に潜んで「君たちの精神はよくわかっている」と最初は言っておきながら、天皇が 2.26 事件に対して「断固討伐」と述べた後は逃げ隠れてしまった人々については「怒りを感じる」と述べています。「シスター渡辺が沢山の著書を上梓して多くの人に読まれていることに関してお父様はどうお思いになるでしょうね？」と保阪氏がと質問すると「よろこびますでしょう。自分の本を読んでもらいたいと思ったのは社会でうまくいかず打ちひしがれている人、会社を辞めようと思っている人達でした。私がそういう人にお伝えしたいのは自分が変らなければ何も変わらない。誰かに咲かせてもらえと思うのは間違いで自分が置かれた場所で咲かなきゃいけないと気付かなければだめよ、ということなのです。」という言葉がシスター渡辺のお答えでした。

⑤ 瀬島龍三

瀬島龍三は戦争中は陸軍参謀として活躍、戦後ソ連に抑留され、最後の引き揚げ船で昭和31年に日本に帰国しました。昭和21年にはソビエト側の証人として一時帰国して東京裁判に出廷しました。山崎豊子さんの小説「不毛地帯」に「壱岐」として登場して、これが素晴らしい人物として描かれていて、多くの人がこれがそのまま瀬島龍三の実像と誤解しているようですが実際はその経歴には謎が多く、スパイ説も根強く残っています。ソビエト抑留中には日本陸軍の旧参謀として特別扱いされていたということは事実のようで重労働などは課せられず、情報関係の仕事をしていたという説も

あります。昭和31年に帰国後は商社・伊藤忠に入社、会長までのぼりつめ、中曽根政権の行財政改革の臨調委員としても活躍しました。佐々淳行著の「インテリジェンスのない国は滅びる」の中で1987年に発覚した東芝機械ココム違反事件で、1982年から1984年にかけて東芝機械がソ連に工作機械とそれにともなうソフトウェアを輸出したのだから、これは共産圏には輸出してはならない製品であった。これらの工作機械がソ連の潜水艦のスクリューの制作に使われることになり海軍力が飛躍的に向上した。これらの機械を売り込む際に瀬島龍三も伊藤忠の幹部をして売り込みに協力したと思われるが中曽根内閣のブレーンであったことから不問に付されたと言われていて事実は公表されていません。戦前は陸軍参謀として活躍、帰国後、実力を発揮して伊藤忠の会長まで上り詰め、中曽根政権のブレーンとして活躍したことは紛れもない事実で戦前、戦後を通じて活躍した有能な人だと思います。

⑥ 吉田茂

吉田茂は敗戦後日本の首相をつとめました。これは歴史的には僥倖であったと保阪正康氏は著書の中で述べています。吉田は昭和10年代の軍事主導體制に徹底して反対していたために戦後の日本社会から旧日本陸海軍の肌合いを消すための強い意欲を持っていた。終戦（昭和20年8月15日）以前の5月に天皇に終戦を勧告する近衛上奏文が天皇のもとに届けられましたが、これは吉田茂が原稿を書いたということが憲兵隊の知るところとなり4月14日に逮捕され5月25日まで監獄に閉じ込められていたが該当される罪名はないと言うことで釈放になりました。彼は1946年から1947年及び1948年から1954年に首相を務めました。彼の功績は首相在任中に新憲法を制定したことで講話会議を成功させて、日本を占領下から主権ある国家に導いたことでしょう。マッカーサーは新憲法制定にあたって①天皇は国の象徴とする、②戦争を放棄し武力をもたない③封建制度を廃止するという三条件を入れて原案を作るように将校たちに求め将校達が作った原案をホイットニー氏から吉田首相その他政府の人々に伝え政府のメンバーが多くの不満を持ったが、この方向で憲法改正案が練られることになり新憲法は1947年5月3日に新憲法が公布されました。吉田は天皇の存在が認められ皇統が続くことが決まったことに大きな誇りを持っていたと言われていています。吉田氏は憲法改正には反対で、一度作った憲法を軽々しく改正するべきではないという考え方で、憲法改正の話が出ると機嫌が悪くなったといわれています。昭和26年（1952年）にサンフランシスコのオペラハウスで講話会議が開かれました。「対日講話条約締結調印会議」というのが正式名称ですが要は大日本帝国が解体してあらたに日本国として再出発する「戦争精算」の記念すべき会議と言うことが出来ます。日本にとっては明治維新につぐ第二の開国という言い方もできます。マッカーサーと吉田茂の気脈が通じていたことが憲法改正及び講話会議の成立につながっているとされています。

